医療情報紙を発行する小児科医　塚田次郎さん

仕事、子育て応援したい

「春から続いているおたふくかぜの流行が、まだおさまっていない」

「秋口にはぜんそくの発作を起こしやすい」

塚田さんが発行している「こども通信」には、乳幼児向けの医療情報が満載されている。

「こども通信」は90年7月にスタートした。A4判、表裏で2ページと小粒だが、毎月1回の発行を重ね、01年9月で156号を数える。

塚田さんが記事を書いてパソコンで編集し、院内で印刷している。発行部数は約1000部に達する。市内の小学校などのほか、かつての患者の保護者らに配られている。

発行しようと思い立ったのは「子育てについて情報が、案外知られていないのでは」との思いからだった。

例えば、子供が熱を出した時には服を脱がせた方が良いし、寒がっている時には着せた方がよい。しかし、世間の親たちの間ではその逆をした方がいい、と誤解しているケースが少なくなかった。

流行している病気を伝え、役立ったケースも。「おたふくかぜが上越市内ではやっている」と以前伝えたことがある。またはやっていなかった保育園に子供を通わせていた母親は、この知らせを読むと、早速予防接種を受けさせた。間もなくこの園でもはやったものの、子供はかからずに済んだという。

自治医科大を卒業後、生まれ育った上越市に戻り、小児科を開業したのは90年6月。診察日には、100人から160人の子供たちが訪れる。

「開業医の中で、小児科はうまみが少ないジャンルの一つに数えられているんですよ」と苦笑いする。投薬や検査回数が大人より少ないため、診察料は多くない。

半面、施療は子供の発達の具合に応じ、微妙な違いをつけていかなければならない。

「しかし、子供はこちらが誠意を示せば、元気になってくれる。そのやりがいを感じられるから、続けてこれた」

今年6月、病気の乳幼児を看護する「病児保育室」を開設した。全国でもまだ300前後しかない施設だ。

これまで、子供の具合が悪い時には家庭での看護しか有効な手立てがなかった。半面、共働きの家庭では、両親のうちどちらかが仕事を休まなくてはならなければならなかった。塚田さんの医院では、病児保育室のために専任の保育士を2人置いている。

利用料は1日3000円と割安だが、1日当たりの利用者は1・2人にとどまる。現状では、とてももうけが生じる段階ではない。

「仕事や子育てに頑張る人たちを応援していきたい、という気持ちでやっています」

【平元英治】

つかだ・じろう　上越市西城町1　44歳。

私の町・私の夢

「小さいながら、まとまっている街」という印象を持っている。生活していく上で、最低限の施設はそろっている。半面、もっと子育てがしやすい街にならないだろうか。行政が子育てのためにできる余地はまだあると思う。

21世紀―新潟の100人 ㊶

毎日新聞2001年9月13日